

〈文話〉について —— 〈文章読本〉源流小考

和田 英信

はじめに

文話ということばは、現在ではよほど耳遠くなったように思う。ちなみに国語辞書を引くと、「文章に関する談話」(『広辞苑』)、「文章や文学に関する談話」(『明鏡国語辞典』)という語釈が示されている。こうした説明は必ずしも不正確というわけではないのだが、このままでは要領を得まい。

無論『拙堂文話』『漁村文話』という、江戸の漢学者の著述を想起する人もいるかも知れない。特に日本漢学あるいは日本の中国文学の専門家であれば、文話といえどもなおさず、この二著を思い浮かべるであろう。

しかしながら実は、江戸末期のこの両著作のみならず、明治・大正期にかけては、「某某文話」というタイトルを冠した著述が少なからず行われ、著述の一範疇を形成していたのである。そしてこのことは、今ではほとんど忘れられているのではあるまいか。

本発表では、江戸期から明治・大正期にかけてのいくつかの文話をとりあげ、その源流のアウトラインをたどりつつ、文話なる著述の性格を考えてみようと思う。



報告者の発表風景

〈一〉江戸末期の文話

文話とはそもそも詩話に倣って、あるいは詩話を意識しつつ著されたものであった。では詩話とは何か。

詩話は、もともと詩や詩人の逸話をその内容とする、北宋・欧陽脩(1007-1072)の著述であった。この欧陽脩『詩話』が世に現れて以降、司馬光(1019-1086)の

『続詩話』をはじめ、『詩話』のスタイルに倣った著述が多く行われるようになり、それらを詩話と総称するようになる(欧陽脩の著述は区別して『六一詩話』とよばれる)。詩話は北宋期の文学を担った士人層の情報交換のメディアとして機能しつつ、同時にまた文学批評の著述のなかで大きな位置を占めるようになった。やがて南宋期以降になると、当時増大した詩の新しい享受者層に向けての詩作指南書としての性格も帯びながら、さらに多くの詩話が生みだされることとなる。

日本においても、中国の動向に倣って少なからぬ詩話が著された。大正9年(1920)に刊行された池田四郎次郎編『日本詩話叢書』は全十巻。日本人の手になる六十六種の詩話を集成しているが、これに漏れているものも少なくない。

日本において詩話が多く生みだされるようになったのも、詩を作り読む人々の数が増大した江戸後期以降のことであり、中国における南宋期に類似した状況をそこに認めることができる。詩話の流行とは、いわば詩をめぐる言説の商品化のことであり、その点、詩話という著述には、時代の文学環境のありかたを映し出す鏡のようなところがある。

揖斐高が詳述するように、菊池五山(1769-1849)の著述『五山堂詩話』(文化4~天保3?、1807~1832?)は、文化・文政から天保期にかけてのジャーナリズム(ことばをかえるならば職業詩人や職業批評家)の成立を雄弁に物語るものであった(1)。

また同時に『五山堂詩話』は、ほぼ同時代の中国の著述、袁枚(1716-1797)の『隨園詩話』(乾隆50~嘉慶2、1785~1797)のスタイルを襲うもので、日本における中国詩話受容、ひいては中国文化受容の成熟を示すものであった。すなわち中国における流行が、ほとんど時をおかずに日本において模倣されるようになったのである。江戸後期は、日本における中国文化受容のいわば爛熟期であり、従来の蓄積が様々なかたちで集大成をみせる時であった。古賀侗庵(1788-1847)の『侗庵非詩話』(文化11、1814年自序)は、同時代の江戸詩壇のありかた、とりわけ『五山堂詩話』に代表される、詩や詩評の商品化に対する批判意識(あるいは嫌悪感)に裏打ちされた著述であると同時に、日本における詩話受容の蓄積を踏まえた体系的な中国詩話研究の書として、注目に値する(2)。

一方、最初に著された文話は、斉藤拙堂（1797-1865）の『拙堂文話』八卷（文政13、1830年）ならびに『続文話』八卷（天保7、1836年）。『五山堂詩話』や『侗庵非詩話』とほぼ同時期に文話が現れていることは、はなはだ興味深い事実であるが、このことは文話の成立もまた、中国の文化ならびに詩文評類著述（詩話など、文学理論・批評の書）の受容の蓄積や、揖斐高がジャーナリズムの成立とよぶような、当時の文学環境の成熟を背景とするものであったことを示しているであろう。

『拙堂文話』には、頼山陽ならびに古賀侗庵の序、そして拙堂の自序が附されているが、以下にその一部を引く侗庵の序には、右の状況の一斑が映し出されているだろう。

趙宋而降、詩話の累積 屋を拄うべし。而して文話は則ち絶えて無し。亦た文苑の憾事に属す。邇者明史藝文志を閲するに、閔文振・蘭莊文話有り。錢謙益・絳雲樓書目に李雲文話有り。而して宋・王銍、蚤已に文話を著せり。事は其の四六話の序中に載す。恨むらくは未だ見るを獲ざるなり。然れども詩話の作、彼の如く其れ夥しくして、紕漏百出す。予嘗て非詩話十卷を著し、以て其の繆を斥く。取るべき者は数種に過ぎず。今、文話碌碌委瑣の三子に成れば、則ち其の書の人意に慊らざること、一瞥を待つ無し。猶おこれ無きがごときなり。予因りて文話一篇を著さんと欲す。…

右に見えるように、『非詩話』の著者、古賀侗庵もまた文話の著述を志していたという。そしてまた文話の著者、拙堂自身もまた次のように述べる。

詩の話有ること尚し。四六と詩余と亦た皆な話有り。何ぞ独り文を遺つ。文にして話無きは、豈に缺典に非ずや。余夙に以て遺憾と為す。…

ややくだって嘉永5（1852）年、海保漁村（1798-1866）の『漁村文話』が現れる。かかる集中的な文話出現の背景には、やはりある意味での機運の醸成を認めることができるのではなからうか。『漁村文話』の序ならびに目録後記においても、衆多の詩話に対する文話の欠落に言及している。これらはいずれも、あまたの詩話の受容を前提として、意識されたものにほかなるまい。

さて『拙堂文話』ならびに『漁村文話』は、ともに江戸期の文話を代表する著作として知られるものであるが、これら二著はある意味で、はなはだ対照的な性格を有する。ここでこの点について整理しておこう。

まず『拙堂文話』は漢文、『漁村文話』は仮名交じりの和文。このような使用言語のちがいは、その内容や著述の性格の相違にもつながる。漢文で書かれた前者は、主に中国の文章を対象とする、文学批評・評論の書である。文章を対象としつつも、論述のスタイルとしては詩話に則った著作であり、現実にはともかく、ひろく漢字文化圏全体に向けて発信されたものであった（このことについては、侗庵の序が触れている）。

一方、和文で書かれた後者は、漢文作成の手引きを主旨とする文章指南書としての性格を濃厚に有する。著者海保漁村の中国古典文に対する広範な知識と研究に裏打ちされた、その意味では著者の学識水準の高さを示しているものの、あくまでも漢文を習おうとする初学者を対象とするものである。また和文というスタイルをとったため、論述のありかたは懇切かつ具体的で、参考書としての体系的な体裁をとっている。このことは中国の詩文作成指南書にはあまり見られないことである。以下、『漁村文話』の目録を抜き出して挙げておこう。

「声響」「命意」「体段」「段落」「達意」「詞藻」「三多・三上」「鍛鍊」「改潤法」「病格」「十弊三失」「簡疏」「左伝記事」「史伝記事」「軽重」「正行散行」「錯綜・倒装」「緩急」「抑揚」「頓挫」「警策」「明意叙事」「周漢四家」「唐宋八家」（以上、正編のみ。続は割愛）

かたや文章に関するエッセイ、かたや文章指南書。このうち文話と称するテキストの多くは、『拙堂文話』と『漁村文話』に代表される二種類の文話のあいだに、その性格をおくこととなる（3）。

〈二〉明治期以降の文話

○『漁村文話』その後

明治期以降、様々なスタイルの文話が生みだされるが、それらを見るに先立って、『漁村文話』のその後について触れておこう。

同書はまず、明治11（1878）年、万青堂によって復刻された。また明治24（1891）年には、博文館の岸上操編・内藤耻叟校訂『少年必読日本文庫』第6編に収められた。『日本文庫』は、塙保己一の『群書類従』に範をとり、近世の学者の著述のうち、青少年向けの必読良書を集めた叢書として企画・刊行されたものであるという（第一編、内藤による刊行の辞）。明治26（1893）年には、西村豊編『文章詩歌作法良材』に収められ、くだって大正5（1916）年には、早稲田大学出版部刊の漢籍国字解全書・先哲遺著追補34の松平破

天荒齋講『文章規範』に付録として収められる。その解題にいう、

此書は大田錦城の高足なる海保漁村が、初学に作文の法を指示せんが為、特に仮名文を以て撰述せるものなれば、文を学ばんとする者の必読を要するは云ふに及ばず。故に特に附載して参考に供す。

『漁村文話』が、明治期から大正期にかけての文章指南書のスタンダードのひとつと見なされていたことがうかがわれよう。次に、こののち生まれた様々な文話のうち、筆者が調査しえたものについて、その内容を整理しておく。

○ 日下寛『文話』（刊年未詳）

日下寛(1852-1926)、号は勺水。東京帝国大学講師、大東文化学院教授等を歴任。また哲学館講師をつとめた(『近世漢学者著述目録大成』『漢学者伝記及著述集覧』、また明治28「私立哲学館改正学科表・担当講師」、明治36「私立哲学館大学職員一覧」、いずれも『東洋大学百年史』資料編I下、1989による)。

本書は早稲田大学図書館蔵。哲学館(現在の東洋大学の前身)における講義録として編まれたものと思われる。

全112頁。巻頭に「講師日下寛先生口述、哲学館編輯員筆記」と。刊記・奥付無く、正確な刊行時は不明。

『東洋大学百年史』部局編によれば、明治38年11月に「高等科講義録」を刊行、そのなかに、日下寛「支那文学(文話)」が見える。

また『東洋大学百年史』通史編Iによれば、明治35年から36年にかけての第16学年度においては、従来年度ごとに発刊してきた講義録を、各個別講義別に合冊し刊行したとされているが、そのなかに日下寛「支那文学(文話)」が見える。こちらは72頁。ちなみに早稲田大学図書館所蔵の日下寛「支那文学：文章講話」は同じく72頁とのこと(未見、早稲田大学学術情報検索システムによる)。両者同じものか。

〈目次〉

「本邦文章の沿革」「文辞の称谓」「立言の本旨」「漢土文章の沿革」「文章の体製」「文章の体則」「結論」

「本邦…」は上宮太子の憲法十七条より幕末に至るまでの日本漢文学史。その他は、中国古典文、すなわちいわゆる漢文に関する概説。「文章の体製」「文章の体則」では、作文作法に言及する。

『漁村文話』が参考書であったとするならば、これ

はまさに教室・教場で説かれた教科書としての文話であったといえることができるだろう。

○ 岡三慶『晩成堂文話』（刊年未詳）

岡三慶は生没年未詳。南総の生まれ。本姓松崎氏。江戸に出て医師岡三輔の門に入り、やがて養子として家を継ぐ。経学を森田節齋、詩を森田月瀬に学ぶ。『大学講義』二卷、『孟子講義』六卷等、著書すこぶる多い。文中に「馬琴ノ死ハ居士ノ幼時ニ在リ」と見える。馬琴は1848(嘉永1)年没。天保・弘化の生まれか(以上、『近世漢学者著述目録大成』ほか、本書の記述による)。

本書は全178頁。刊記・奥付等なく、正確な刊行時は不明。短篇の文章エッセイを集めたもの。以下に例として引く一節はかなり世話にすぎた談話調であるが、全体に自由に筆を振るう随筆のスタイルをとりつつ、内容的には初学者向けに文章修養の道を読む啓蒙書といつてよい。

各篇の題目は以下の通り。

「文人タラント欲スル者ハ文ヲ作ルノ稽古ニ孜孜セヨ」「馬琴ヲ引キテ前話ヲ証ス」「屈伯兩伝ト蘇秦伝ノ優劣」「文ヲ学ブハ字ヲ習フニ同シ」「学者ハ時ヲ知ルヲ要ス」「文ヲ書ク時ハ当ニ勇氣ヲ振フベシ」「文明の士は文を作るに上手なるへし」「時世ハ文ヲ扇選スル箕ナリ」「韓蘇ノ竹頭木屑」「竜頭蛇尾」「文明ノ文人ハ偏漢偏洋なる可からず」「日本外史ハ則チ宮島ノ写真ナリ」「頼翁ノ後作ノ文」「詩ハ無事ノ日ニ行ハレ文ハ有事ノ日ニ行ハル」「和文ニハ気魄有ル者至テ鮮シ」「学者自ラ尊大ニスルノ弊」「日本一品ノ大作」「日支兩國ノ学問文章ノ比較」「日本文にして筆を危き所に行る者」「民智進歩ノ駿速ハ革命ノ賜ナリ」「仮名交文を作る者も以来は大に精神を尽せよ」「日本七種ノ漢文ノ分疏」「詩文ヲ作ル者ノ天性ノ異」「古文ノ方法ヲ研究スル業ノ権輿」「深草ノ元政ハ古文ヲ善クス」「善良なる書籍の流行は活眼異常の士の指導に依る」「最利最益ノ書」「経済ノ真理ヲ知ル者無キヲ驚歎ス」「伯夷列伝」「解剖学法ノ區別」「専門の学科」「言文一致」「両様ノ孔夫子」「能文ノ士為ラント欲スル者ハ師ヲ選ブヲ要ス」「能文者為ラント欲スル者ハ当ニ以テ其眼ヲ活セヨ」「難ヲ設ケ以テ上ノ余意ヲ発ス」「巧ニ文ヲ作ラント欲セハ接進転ノ三辞ヲ巧用スル法ヲ悟入セヨ」「儒学ノ五派」「至文ハ之ヲ如何シテ作り得ベキヤ」「先師ノ唇授面伝法」「先師ノ期スル所」「某藩学ノ教頭一タヒ節翁ニ遇ヒ三年ノ文章忽チ空ト為ル」「是モ亦愚ナラスヤ」「文法モ亦一子相伝ノ秘訣」「先師カ集テ大成セシ所」「古文ノ一大変革」「世間漸積法ヲ信スル者幾ト希

レナリ」「真学者ノ書冊ハ垢ニ塗ル」「生徒学業ノ成否ヲ占知スル法」「大田錦城ノ精熟」「月翁老後ノ勸学」「韓柳ハ今ノ所謂哲学者ナリ」「文源」「自由ノ氣ニ富ム者ノ文挙テ書キ尽ス可カラザル理由 其一」「同其二」「活文章ヲ作為スル訣」「読書の法」「漢文ノ漢臭」「伯夷列伝ノ残話」「告別ノ辞」

内容の一部を例示する。

「諸君講師の真打を看玉へよ、当世名高き真打なる燕林、燕尾、伯圓、伯山輩の話す癖でも、前坐中坐等の話す癖でも癖には差ひはありません、左れども孰の御客でも前坐や中坐の話す癖を嫌つて真打の話す癖を聴きたがるのは、外の理由ではなく、其話し方に上手下手が有るからであります。文も亦夫れと同じ道理で、其事の道德が幾羅高くても、其人に幾羅名論奇説が多くありましても、文章が下手では、誰も読んで呉れません、夫れに引替へ文章が上手なれば、少し其議論が迂遠でも、其文の優れて面白きがために、世の人々が読みたがるは、丁度燕林の講釈を聴きたがると同じであります。況んや其人に須変佐須多因に負けぬ卓説名論が有つて、其文の巧妙なるは韓愈東坡も及はぬ程で有ることなれば、夫れこそ鬼に鉄棒、誰も敵する者はありませんからして、世間の本を読む人は皆兜を脱で降参して読み手となります、左すれば燕林輩の較らべ者になるものではありません、かるが故に思想を人に示したく望む人は上手に文を書きませんければなりません」(文明の士は…)

○ 『鷗外文話』(明治24年、1891年)

森鷗外(1862-1922)、小説家。

雑誌『^{しがらみ}柵草紙』20号に、「鷗外文話」の総題のもと収められた文学エッセイ11篇。うち5篇は明治23年、『國民新聞』に「瀛西詩話」の表題のもと掲載されたもの。

「あづまや」「盲帝の曲」「今の英吉利文學」「白璧の微瑕」「ドオデエ」「地震の作者」「大家」「鬼才」「詩句霸王樹の如し」「小説中人物の模型」「毒を以て毒を制す」

○ 『文章世界増刊・文話詩話』(博文館、明治40、1907)

『文章世界』は、博文館によって明治39年03月15日(1906)創刊された月刊文芸・投稿雑誌。文章の書き方、投稿作品と短評で構成。本書は翌明治40年刊の増刊である。雑誌メディアによる文話。

目次・口絵のあとに、「文壇五十七名家」と題して、

文学者の肖像写真を掲載する。その名を挙げれば、

井上哲治郎・坪内逍遙・三宅雪嶺・芳賀矢一・竹越三又・徳富蘇峰・上田萬年・森鷗外・川上眉山・巖谷小波・廣津柳浪・石橋思案・江見水蔭・小栗風葉・泉鏡花・徳田秋声・柳川春葉・姉崎正治・上田敏・大町桂月・伊藤銀月・長谷川天溪・三島霜川・佐藤紅緑・高浜虚子・米光關月・生田葵山・岩野泡鳴・児玉花外・与謝野寛・平木白星・河井醉茗・鳥谷部春汀・幸徳秋水・志賀矧川・山路愛山・登張竹風・水野葉舟・窪田空穂・正宗白鳥・小川未明・小山内薫・蒲原有明・薄田菫華・徳富蘆花・小島烏水・田口掬汀・内藤鳴雪・佐々木信綱・与謝野晶子・金子薫園・尾上柴舟・国木田独步・小杉天外・塚原洪柿・島崎藤村・夏目漱石

〈目次〉

《文話詩話》—— 坪内逍遙「小説と脚本の違い」、竹越三又「書簡の文学的価値」、幸徳秋水「論文の三要件」、井上哲次郎「近世漢文家の特色」、戸川秋骨「叙事叙景の文章」、柳田国男「官吏の読む小説」、松井柏軒「現代新聞記者短評」、尾上柴舟「古歌の新研究」、塚原洪柿「歴史小説の文章」、蒲原有明「新しき声」、大町桂月「半生の文章」、山田美妙『「言文一致」の犠牲」、長谷川天溪「文字の歴史的価値」、鳥谷部春汀「文章雑感」
《新式作文法》—— 論文作法・叙事文作法・叙情文作法・書簡文作法・小品文作法・新体詩作法・短歌作法・俳句作法・漢詩作法・小説作法

《研究》—— 和漢洋文学研究順序(国文学・漢文学・外国文学)

《雑録》—— XXX「古今文人逸話」、一中学教師「現今の学生と文章」、水野葉舟「説明式と描写式」、吉江孤雁「叙景文の新意」、田山花袋「文壇近事」

このほか、『龍頭』として、欄外に「十二ヶ月の異称」など、かなり詳細な作文資料が附される。

○ 田山花袋『花袋文話』(博文館、明治44、1911)

田山花袋(1871-1930)、小説家。

〈序文〉

「文芸と文章とに就いて著者の述べたものを輯めて見たのが此書である。講話もあれば談話もある。長い間研究して置いて書いたものもあれば、其折々に就いて単に自己の意見として述べたものもある。文芸に携はる人達に取つて、多少の参考になり得ればそれで著者は満足する。」

〈目次〉

「描写論」

「明治の作品研究」——紅葉の「多情多恨」、一葉の「たけくらべ」、柳浪の「今戸心中」、天外の「はやり唄」、風葉の「青春」、二葉亭の「平凡」、独歩の「牛肉と馬鈴薯」、藤村の「春」、漱石の「それから」、上田敏の「うつまき」、白鳥の「落日」

「卓上語——前栽・前栽と度数・雑多紛々・新しき理解・タイフとパソナリチイ・新傾向の俳句・説明と描写・逸し易き印象・人生批判・筋書評・新聞記事と芸術・フロオベル・「ホルラ」・皮剥の苦痛・残酷・トルストイ・トルストイとモウパッサン・「夜の宿」・爾人間よ・子供と旅・想像と作品・眼の芸術・洪水・平凡の痛苦・「をんな」・全責任・俳人一茶・田園の子弟・強弱・田舎の人への手紙・横と縦・心理描写・チエホツの「決闘」・理解・選択・再び作者の批判・事件・印象主義・印象に富んだ書・微かなる匂ひ・人情・人情の撲滅・束縛・涙・「出発前半時間」・「生田川」・細かい心理・平行線・覚醒・「寄生木」と書いた理由・麦の道・模擬者・寂々・肯定？否定？・作品の価値・逼真・背面・雨・友・感激のライフ・南の窓・自然物・真剣・此頃の脚本・新しい刺激・生効・現実・誤解・弱者の文芸・上と下と・イブセン・背面の主観・アルツェハアセフの「妻」・享楽・ある対話・ライフ・一葉・独歩・西鶴の「置土産」・アンドレーエフ・客観といふこと・完全と矛盾・現今の文壇・デカダンの群

「文章より見たる現代の小説」——革新以前の文章・鴎外と二葉亭・物語風の小説と描写式の小説・白鳥と青果と未明と・読売新聞に掲載された小説・自己描写——草平・所謂新しい文章・漱石と虚子・葉舟と小剣・秋声と藤村

「文章新語」——説明の文章・状態描写・印象的描写・離れた気分と情調・ノートと写生・「筋」・文章と対話・新しき紀行文・文章の調子・自然の描写・手紙の雰囲気・日記の種類・新しき情緒・新傾向の俳句・模倣と創意・文字の選択と辞句の排列・触れるといふ事・自然と不自然・再現といふ事・文章と型

「旅とインキ壺」——三浦半島・漁師の家・波濤・岬頭・小国の美・大阪の感化・港

「山水小論」

「現代の紀行文」

「諸家文章短評」

「短篇小説の話」

「フロオベルとゴングール」

「アルフォオンス・ドオデユ」

「太平記と南朝の遺蹟」

『方丈記』に現はれたる源平の盛衰

『浦のしほ貝』に見出したる“自然”

○ 金子薫園『文話歌話』（大同館、明治44、1911）

金子薫園（1876-1951）、歌人。

「本書は予が文章と和歌の上に於ける、折々の感想を編術せるものなるが、もと、初期の研究者に示すべき目的にて書き綴りし類ひ其の多きを占めれば、他も之れに倣ひて、努めて叙述の平易卑近なるを期したり。なほ別に添ふる所の“文章月令”は、月々に起れる特殊の自然と人事とに就き、多少の新意を注げるもの、かねて又文章の資料たらむことを欲せり。」

〈目次〉

「自己の為めの文章」「新しい歌」「いゝ文章」「自覚と云ふこと」「短歌と絵画と」「円みのある作品」「作の上の自由」「叙景の歌の真意義」「新緑の森の観方・描き方」「西行の歌」「『倫敦塔』の一節」「黄葉の観方・描き方」「二種の感興」「短歌に於ける配合」「今の眼で観た古人の春と夏の歌」「迷ふと云ふこと」「歌の出来る時」「生きた会話」「景色の纏め方」「歌を詠む二人の態度」「力のある文章」「興味から作ること」「今の人々の秋の歌」「『寒月照梅花』に対する聯想」「徹底と云ふこと」「日課に歌を詠むと云ふこと」「長文と短文と」「作歌と初期の修養」「候文と口語文」「戸外で出来る歌」「文章推敲の実例」「歌の材料の扱ひやう」「思ひついたこと」「文章の互評」「歳暮と日記文」「『雪中松』に就いて」「初春の景色の写し方」「私が歌に志した初め」「昔の歌と今の歌」

○ 萩野由之『史話と文話』（博文館、大正7、1918）

萩野由之（1860-1924）、国文学者・史学者。東京帝国大学教授。

〈例言〉

「本書は、余が国史や国文に関する雑説五十篇を輯めたのであるから、内容を其まゝに、史話と文話と名付ける。／話といつても筆話で、自ら記したのであるが、中には少しは講演の速記も雑つてゐる、大抵口語体であるが、文章体のももある、今更改作も面白からず、すべて旧面目を其まゝに雑載した。／天下の読書子に此書を薦めるのは、国民一般に国史国文の趣味の普及を促したい為である、国民は将来の発展を期待しながらも、過去の径路を忘れてはならぬからである。」

〈目次〉

「三種の神器の来歴」「神武天皇と明治天皇」「御即位大札と歴史教育」「立太子札と歴史教育」「順徳上皇の佐渡にて生まれ給へる皇子」「新年宴会」「昔の天長節」「孝子節婦の褒賞」「阿部仲麻呂は叛臣なりや」「利仁将軍」「藤原保昌と強盗」「東国武士の決闘」「死んでも死なぬ隆盛と義経」「隠れたる大学者」「松平定信と日本外史」「狂歌で一生を送った蜀山人」「沼河姫と越後」「護王神社の祭神に加へられたる和気広蟲」「清少納言の意気」「朱成功の母田川氏」「女の歴史家荒木田麗女」「国史は如何にして研究すべきか」「郷土史料の編纂」「新年の反省と計画」「偉人の言行を学ぶには此の注意を要す」「国文を練習する一つの方法」「誤れる文章(伴蒿蹊と新井白石)」「誤謬ならざる文章(平治物語の一例)」「太平記の五不思議」「文字の読方にも古今の変遷がある」「法律から出た言語」「最古の刺繍」「勅撰集があるとしたならば」「歌集を讀みて」「地方に於ける歌学者の系統」「国文学者と筆迹」「歌人の短冊を集める人に」「若林寛齋の歌話」「花美と人美」「松の文学観」「梅花の歴史」「七夕の古今」「昔の速記術」「神皇正統記を讀む」「新編御伽草子の初に」「日本国夷人」「遊君故事」「太閤と曾呂利」「頼山陽天草詩幅の後に書す」

○ 幸田露伴「日本文話」(大正 9、1920)

幸田露伴 (1867-1947)、小説家。

本文は、雑誌『婦人世界』大正 9 年 1 月、2 月、3 月号掲載、未完。のち『續露伴小品』、『露伴全集』25 収。

「(日本の文章が)どのやうなものであらせねばならぬかといふことについて」考える前提として、「日本の文章が、どのやうなものであつたか」を講じたもの。すなわち日本文学史概説。ただし古事記を論じたところまでで中断し未完。

○ 八波則吉『文話歌話・鑑賞から創作へ』(敬文館、大正 15、1926)

八波則吉 (1876-1953)、国文学者、国語教育学者。第五高等学校教授。大正 7 年から使用された「尋常小学校国語読本」(ハナハトマメマス)を編纂したことで知られる。

〈はしがき〉

「名文の名文たる所以を研究して読書及び作文の参考に資したい。——これは余が多年の宿志で、本書は之が為に尽した微力の堆積である。／書中、談話体ものは教育会などで講じた拙話の筆記で、演述体ものは新聞雑誌等へ寄せた原稿である。但し、いづれにも修正の筆を加へた。／各篇「読切」である。／排列の順序に就いては別に深い意味はない、たゞ長短難易を錯綜して読者の倦怠を避けようと試みた。／本書の内容は、嘗て『応用修辞学講話』と題して世に問うたが、間もなく震災に罹つたので、今回大修正を施し、更に新作を加へ、面目を一新して復興したのである。／叱正を仰ぐ。」

は新聞雑誌等へ寄せた原稿である。但し、いづれにも修正の筆を加へた。／各篇「読切」である。／排列の順序に就いては別に深い意味はない、たゞ長短難易を錯綜して読者の倦怠を避けようと試みた。／本書の内容は、嘗て『応用修辞学講話』と題して世に問うたが、間もなく震災に罹つたので、今回大修正を施し、更に新作を加へ、面目を一新して復興したのである。／叱正を仰ぐ。」

〈目次〉

第一講「文の背景(緒言・俳句・和歌・小説・余論)」「蕪村の俳句」
 第二講「作家の気転(大要・説明体・自序伝体・一利一害・評語・知悉・臚化法・現在法・対話法・結末)」「想像の余地」
 第三講「物も言ひやう(序言・婉曲・暗示・美化・側写・縦擒・諷諭・反語・結論)」「上品な和歌」
 第四講「真似の生命(創作と翻訳・発明と改良・真似・生命・真似の種類・真似と感化・結末)」「作文問答」
 第五講「祝詞の研究(序言・祝詞とは・祝詞の文章・散文詩・思想の雄大・冒頭法・誇張法・網羅法・省略法・声調の和正・対句法・繰返法・結論)」「和歌の起源と楽天生活」
 第六講「日本文学の特徴(文字・文学・短詩形・縁装・頭字韻・擬声・敬語)」「敬語と国体」
 第七講「事のたとへ(緒論・譬喩法・説明的・修飾的・注意・解題・引喩・諷諭・結論)」「一茶が同情」
 第八講「歌と型(歌は型・型とは何か・文化の継承・読本の韻文・型に嵌めた歌)」「歌の口調」
 第九講「自己哀憐の文学(解題・腹ふくるゝ業・土佐日記・感情の共鳴・一茶全集・曙覧全集・結論)」「防人等が歌」
 第十講「謡曲の修辞(緒言・謡曲の形式・律格・押韻・反覆・縁装・対偶・謡曲の内容・引用・警句・対照・結末)」「謡曲無用の用」
 第十一講「文学上の絵空事(解題・誇張法・現在法・反語法・転義法・結論)」「消息文の奥義」
 第十二講「文の妙趣(盾の両面・朝日影・朧月夜・一実凶頓)」

〈三〉 文話とは何か

第二節に挙げた文話を次に再び掲出する。

- (1) 日下寛『文話』(刊年未詳)
- (2) 岡三慶『晚成堂文話』(刊年未詳)
- (3) 森鷗外『鷗外文話』(明治 24、1891)
- (4) 『文章世界増刊・文話詩話』(明治 40、1907)

- (5) 田山花袋『花袋文話』(明治44、1911)
- (6) 金子薫園『文話歌話』(明治44、1911)
- (7) 萩野由之『史話と文話』(大正7、1918)
- (8) 幸田露伴「日本文話」(大正9、1920)
- (9) 八波則吉『文話歌話・鑑賞から創作へ』(大正15、1926)

まず大きく分けるならば、漢学系の作者の手になる(1)(2)と、その他のものに分けられるであろう。

(1)(2)両者に共通するのは、衰退しつつある明治期の漢学の再興に資することを意識したものであること。(1)は哲学館の講義録だが、哲学館はそもそもその設立の趣旨・目的を漢学の振興に置いた学校であった。また(2)においても、次のような一節が見える。

余思フニ漢学ノ一朝衰テ茲ニ至リシ所以ノ者ハ、諸般専門科学ノ具備セサルニ依レリ、然レトモ漢学ハ断シテ廃棄ス可カラス、如何トナレハ、我社会ノ文字ハ、其源ヲ此ニ発スルヲ以テ、我同胞兄弟カ挙テ横文字ヲ以テ普通トナスノ日ニ至ラサレハ、断シテ漢学ノ跡ヲ社会ニ滅スルコト無ケレハナリ、故ニ今日ニ在テハ、漢学ノ隆興ヲ謀ルハ目前ノ急務ニシテ誠ニ之ヲ謀ルカ乃チ漢学中亦専門ノ学科ヲ創設セサル可カラス、此居士カ文話ノ一科ヲ草セシ所以ナリ、居士縦令多忙ト雖筆ヲ走ラシテ、胸ニ浮ヒシ所ヲ漫録シ、以テ之ヲ世ニ告ケレハ、世間或ハ之ヨリ端緒ヲ見出シ、因テ専門学ヲ創興スル者アルナキヲ保セス、苟モ然ラハ漢学ニ於テ専門科業ノ具備スル、年ヲ期シテ待ツ可シ

やや降って、大正5年刊、「漢籍国字解全書・先哲遺著追補」の「発刊の辞」も挙げておこう。これは先に見た『漁村文話』を付録として載せたものである。当時の漢学の置かれた状況の一斑をうかがうことができるであろう。

我が文化の根柢たる漢籍の挙つて高閣に束ねられんとするの時に当り、多年の計画に基き、学会必須の漢籍中、既に先哲の和解ある良書は之を採り、良書なきものは現代大家の撰述を求め、第一輯十二冊(第一巻より第十二巻迄)第二輯十三冊(第十三巻より第二十五巻迄)第三輯八冊(第二十六巻より第三十三巻迄)合計三十三冊を逐次刊行して、殆んど漢文学の根本書を網羅したり。一世之が為に風動し、將に廃れんとせし漢文学の研究爰に復興し、出版界また争つて其壟に倣ひたるを以て、漢文学和解書の刊行、近年無比の盛況を極むるに至りたるは、聖代の為に、深く之を賀せ

ざるべからず。…(早稲田大学出版部)

(4)は雑誌の特集としての文話で、なかでもユニークなものといえるだろう。その「編輯余録」を見るならば、

新しい時代の新しい文章詩歌を学ぶに方つての舟筏たらんこと。これが『文話詩話』の抱負です。編者また私かに信ずらくは、親愛なる読者諸君にして、この一冊を熟読玩味せられたならば、新しい文章詩歌を作り、真に人生の為に、これを活用することが出来るであらうと。

「現今の文人詩客の肖像を、悉く集めて、読者をして、親しく一室の中に相会するの思あらしめようとした」(編輯余録)巻頭の「文壇五十七名家」をはじめ、〈文話詩話〉には文章・詩歌に関するエッセイを収め、〈新式作文法〉ではやや具体的に技術論を述べ、〈研究〉では「国文学」「漢文学」「外国文学」の研究法・重要書籍の解題等を説き、さらに作文便覧としての〈龍頭〉を載せるなど、まさに至れり尽くせりである。

本書は基本的には日本語文を説きながらも、しばしば漢詩文に言及する。井上哲次郎「近世漢文家の特色」が江戸・明治の漢文作家に言及するのは、その主題から見て当然としても、たとえば竹越三又「書簡の文学的価値」は、フランスのマダム・ド・セヴィネーの娘に寄せる手紙や、英国のリチャードソン「クリッサ・ハーロー」とならべて、『文選』に見える「与某某書」の文学性に言及し、さらには袁枚・蘇軾・歐陽脩などの書簡に学ぶべきことを説く。また幸徳秋水「論文の三要件」もまた、諸葛亮「出師表」や孟子に言及する一方、スペンサーに説きおよぶ。当時の雑多な言語環境、過渡的な“文章世界”のありかたが投影しているようで興味深い。

小説家による(3)(5)、歌人による(6)、歴史家による(7)、国語教育者による(9)は、著者の立場に応じてそれぞれに個性的である。

泰西文学の新思潮の紹介を主な内容とする森鷗外(3)は、最も純粋な文学エッセイといってよい。文章指南書としての要素はほとんどなく、明治期の他の文話と異質ではあるが、その点ではむしろ詩話・文話本来の随筆としての性格をまっすぐに受け継いでいるともいえる。

田山花袋の(7)は文章・文学エッセイ。いわゆる自然主義の立場にたった文章論の展開が中心だが、同時代作家の作品及び文章に対する論評が多く含まれて

いる点に特色が認められる。

金子薫園（5）は、基本的には右に同じい。『文話歌話』と題する通り和歌に対する言及が多いが、一方『倫敦塔』の一節では漱石の文章の分析を試みており、さらに「候文と口語文と」「文章推敲の実例」「初春の景色の写し方」など、具体的な技術を説く作文指南書としての性格もあわせもつ。「文章月令」は模範作例集、一例を挙げよう。

寒は今最中なり。空晴れて風なく、日は晃らかに照れども、外気凍りて、触るところ刀の如く人を刺す。深沈として動かざるものあり、人の腸を寒うし又清うせしむ。晶然として咲き出づる白梅は、寒の生める花なり。一朵の花、庭の冬枯を領して、地上の権威なり。

萩野由之（6）は歴史エッセイといったおもむきだが、学者の著述だけあって歴史や文学に関するトピックの考証に傾く。幸田露伴（7）もまた、小説家というよりも古典研究者としての露伴の学識が投影されているようだ。

八波則吉（8）は、国語教育者の手になるものだけあって、目次等を瞥見すれば知られる通り、文章指南書としての体系性を最も備えている。

このように一口に文話といっても、かなりバリエーションに富んでいるように見える。ただ内容・体裁面からは、エッセイ型と文章指南書型（及びその折衷型）に大きく分けることができるであろう。すなわち先にも触れたように、文章エッセイとしての『拙堂文話』と文章指南書としての『漁村文話』のふたつの範疇に収まるといってよい。もちろん漢文と日本文という対象のちがいは無視できないが、文話という著述の性格は受け継がれているのである。

また森鷗外あるいは萩野のものがやや例外に属するほか、濃淡のちがいこそあれいずれも創作の前提としての文章論であるということができよう。これらが文学論・文章論一般と異なるのは、あくまでも創作の参考のためのものとして、啓蒙的な立場から書かれていることである（海外の文学事情に関する新情報の紹介という意味では鷗外の著述も、あるいは自ら「天下の読書子に此書を薦めるのは、国民一般に国史国文の趣味の普及を促したい為である」と説く萩野の書もまた、十分に啓蒙的である）。

さてかかる文話という著述は、現在全く著されることはなくなった。しかしながら、こうした性格の著述

が全く無くなったわけではない。すなわち（文章読本）といわれるものがそれである。

斎藤美奈子『文章読本さん江』（筑摩書房、2002年）は、いわゆる文章読本という著述カテゴリーの「脱臼」ぶり、存在意義の不可思議さ——すなわち文章読本が実は読者のためではなく著者自身のために書かれていることを、白日のもとにさらし、小気味よく揶揄することで一定の評価を受けた。

このことはさておき、いま文章読本が説く文章作法として同書が挙げるところを見るならば、それらが江戸期の文話以来、語り継がれ説き継がれてきたものに重なることに気づく。試みに斎藤の挙げるものと『漁村文話』の章目とを対照させてみよう。

斎藤美奈子「文章読本が説く五大心得」

○わかりやすく書け

→「明意叙事」文ノ大要、意ト事トノ二端ニ過ギズ。…大要、ソノ意ヲ明カニスルニ在リ。…事ノ豪末コトゴトク著ワレシム。

○短く書け

→「簡疏」文ノ尤モ難シトスルハ、事ヲ記スルニ在リ。ソノ故ハ、事ヲ記スルハ簡ヲ貴ブ。…若シ記載ノ詳ナランコトヲ欲シテ、瑣事末事、一一ニコレヲ挙ゲナバ、唯ソノ冗蔓厭フベキノミナラズ、併セテ人ヲシテソノ要領ヲ観ルコトヲ得ザラシム。）

○書き出しに気を配れ

→「体段」起ハ如何ニ語ヲ下シタルガ篇意ニ協フベキ、…深く考ルコトナリ。…起結ハ一篇ノ取り極マリノ付ク処ニシテ、最モ作家ノ難事トスルコトナレバ、別シテ深く心ヲ用ベキナリ。

○起承転結にのっとって書け

→「体段」大意ステニ定マリテ後、一篇ノ体段ヲ考フベキナリ。体段トハ一体ノ布置スベテノ配リ付ケナリ。

○品位をもて

→「病格」文ノ病ニ数種アリ。…「俚」トハ、言ノ野鄙ナルナリ。…「陋」トハ、世俗ノ極メテ鄙シキ意ヲ用テ文トスルナリ。

このほか、「文章読本が激する三大禁忌」として挙げる「新奇な語を使うな」「紋切り型を使うな」「軽薄な表現はするな」。また「文章読本が推す三大修行法」として挙げる「名文を読め」「好きな文章を書き写せ」「毎日書け」なども、『漁村文話』をはじめとする文話のなかで、繰り返し説かれてきたことであった。要するに文話とは、斎藤のいう文章読本の前身にほかならないのである。

斎藤は文章読本なる著述の性格を分析する一方、その背景となった明治以来の作文教育の変遷をリサーチしたうえで、現代あまた行われる文章読本の元祖ともいべき谷崎潤一郎『文章読本』(昭和9、1934年)の新しい特質として、その「文芸批評化」を指摘する。これをさらに細かく説きわけて、①技術論の衰退、②個別的な批評の台頭、③文芸作品への偏重、④エッセイ風の体裁、を挙げ、「文章読本とは文芸批評的に書かれた文章指南書のことであり」と再定義する。歴史的変遷とは各人の視点の置き方によって、その映り方・見え方に異同が生じるものであろうが、少なくとも斎藤がいう「文芸批評」的性格は、明治・大正期、さらにさかのぼれば、江戸後期の文話に夙に見出されるものなのであった。

遠く欧陽脩の『詩話』に源を発し、やがてそれぞれの時代背景を反映しつつも、その基本的性格を維持し、明治・大正期に到るまで書き継がれた文話(あるいは某々話という著述)。現在ではその特徴的な一部は〈文章読本〉と名をかえ、また全体として大きくは文章論・文学論あるいは随筆・エッセイのなかにも浸潤している。この報告では、これを文話という名で著した時代があったことを示しつつ、その消長のアウトラインをたどってきた。ここで最後に考えてみたいことは、何故〈文話〉は無くなったのか、ということについてである。

まずは谷崎『文章読本』の存在があるであろう。斎藤も指摘するように、特に戦後に著された類書はほとんどが谷崎本を意識し、さらに書名もまた踏襲した。

また本稿では触れなかったが、〈文話〉という語が、学校における作文教育の分野での特殊なタームとして用いられるようになったことも関係があるかも知れない。

芦田恵之助(1873-1951)は「随意選題(思った通りに書け)」の主張で知られる、大正から昭和にかけての作文教育界の大御所であるが、彼の用いる〈文話〉とは、教師が綴り方の心構えや、綴り方そのものについて話をすることであり、彼の指導実践において重要な位置を占める(4)。

大正期から昭和にかけても実は文話を称する著述は生まれたのだが、そのほとんどは教室における作文指導実践の方法(あるいはその一要素)を説く著述のタ

イトルに見えるものである。これらと入れ替わりに、谷崎『文章読本』が世に現れたことになる。

いまひとつの理由として考えられるのは、漢学のさらなる衰退である。『日本国語大辞典』が〈文話〉の用例として唯一挙げるのが次のものである(下線部)。

支那では流石に文学の国であるだけに古くから批評が可なり盛んであった。夫の六朝あたりから起つて唐宋就中宋以後に栄えた修辭、詩話、文話の類、其他画話、金石談の如きから、金元以後には金聖嘆等が小説批評の如きすら出て来た。古人をして宋に詩なくして談詩ありといはしめたのを見ても、其の如何に批評の盛であつたかは推し測られる。唯此等断片の批評を全体の上から見て、そこに一貫した意義乃至傾向といふやうなものを見出す研究が欠けていたのである。(島村抱月「近代批評の意義」(5))

明治の終わりに著された右の文には、〈文話〉が、中国の宋以来の伝統的な批評のスタイルであることが明確に意識されているが(ちなみに島村は早稲田大学において「支那文学史」を講じたことがあった)、おそらくは大正以降、特に昭和に入ってから、漢学の衰退に右に挙げた事情もあいまって、〈文話〉なるものの存在は曖昧となり、特に遠く欧陽脩『詩話』に濫觴を見る著述伝統の響きを感じしえた世代は次第に寥落に向かったのではあるまいか。ひるがえって、〈文話〉のこうした消滅のありかたにもまた、漢学の残照を見いだせるというべきであろうか。

注

- (1) 揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』(角川書店、2001年)
- (2) 以上、拙稿「中国の詩話、日本の詩話」(『お茶の水女子大学中国文学会報』25、2006年)を参照されたい。
- (3) なお江戸期には、このほか、萩原楽亭「嵩岳文話」、菊池三溪「晴雪楼文話」、中井乾斎「古今文話」等の文話の存在が、諸書目等によって確認できる。
- (4) 『尋常小学級方教授書』四巻 1918~21年、ほか。
- (5) もと『早稲田文学』1906(明治39)年6月、いま引用は『囚はれた文藝』1948年によるが、明白な誤字を正した。